京都大学新聞社主催・11月祭企画

岩見隆夫・前原誠司　討論会

現代政治を斬る！

――「日本新党的なるもの」の検証を通して

11月22日(火)　午後2時より
本部構内法経一番教室にて

まえはら・せいじ

一九六二年京都市左京区生まれ。京大法学部卒業後、松下政経塾入塾。九一年四月、府議会史上最年少で京都府議会議員に当選。九三年七月の衆議院議員選挙京都一区に日本新党から出馬し、二位当選。今年五月新党さきがけへ移党。現在、外交委員として活躍。

来たる十一月二十二日火曜日に、京大本部構内の法経一番教室において、京都大学新聞社主催の討論会「岩見隆夫・前原誠司討論会　現代政治を斬る！――『日本新党的なるもの』の検証を通して」が開かれます。昨年七月の衆院選で日本中に大旋風を巻き起こした日本新党でしたが、今年の十月三十日の第一回党大会で解党が決まりました。結党からわずか二年半での結末に、どこか釈然としない思いを抱いている方も多いと思います。今回の討論は、日本新党の検証、日本新党ブームの考察を踏まえた後、現代日本における政治を取り巻く問題点、現在における政治の果たすべき役割などについても論じたいと思っております。今号では、討論に先立って行われました当社OBである岩見隆夫氏へのインタビューも、合わせて掲載します。

九〇年代初頭、人々は五五年体制の中で行き詰まった政界に飽き飽きし、性懲りもなく汚職を繰り返す政治家に愛想を尽かしていた。投票率は選挙毎に低下し続け、人々の政治離れは誰の目にも明らかであった。

そんな中に日本新党は登場した。「殿様」と呼ばれる名門細川家の当主、細川護熙が「理想主義」を掲げて政界に打って出ると、それはマスコミの競って取り上げるところとなり、知名度を高めていった。

その後九二年の参院選では四議席に留まったものの、九三年七月の衆院選では三十七議席を一挙に獲得する大躍進を遂げる。これは、近年とみに増えてきている無党派層（政治に関心はあるが、固定した支持政党のない人々。都市部に目立つ）の支持を集めたためと言われる。

そして衆院選直後、日本新党代表・細川護熙は首相になる。これに対し、国民はいずれの調査でも八〇％前後の支持率を示した。その勢いに乗り、細川政権は「政治改革関連法案の制定」と「ウルグアイラウンドの決着（コメの一部市場開放）」という、これまでの自民党政権がなし得なかった二つの重大事をなした。

しかし今年に入って日本新党は揺れ出す。統一会派を組み、やがては併呑するはずだった新党さきがけとの仲がこじれ、決裂してしまったのだ。そして政界は再編に向け混迷していく。その中で、「クリーンさ」と「新しさ」を看板としていた日本新党は、ドロドロした政変に巻きこまれるなど、支持率を落としていった。最高で一七％あった日本新党の支持率は、まもなく一％を切り、最終的には〇％まで落ちた。そして十月三十日の第一回党大会での解党決定となる。

なぜあれほどの「日本新党ブーム」が起きたのだろうか。また、なぜ人々は見捨てたのだろうか。原因はいろいろ考えられようが、それらの原因は日本新党の発足当初から内包されていたのではなかろうか。

討論はそういった日本新党の実像への検証を行いつつ、そこから現在政治を取り巻く環境や、その抱える問題などを論じていきたい。今回我々が日本新党に

いわみ・たかお

一九三五年中国大連市生まれ。五四年京大法学部入学後、弊社（当時の名称は学園新聞）編集員として活躍。五八年毎日新聞社入社。以後、政治記者として活躍。現在編集局顧問。九二年に日本記者クラブ賞受賞。近著に「自民党没落の軌跡」「昭和の妖怪　岸信介」。

ついて考えるのは単に日本新党を葬送するためではなく、現在の日本の政治を考えていくためのきっかけとするためである。

演者のうち、岩見隆夫氏は一九五八年に京大法学部を卒業後、大阪毎日新聞社社会部に入社。後に東京毎日新聞社政治部に移り、現在に至るまで三十年近く日本の政治の中枢を見てきたベテランの政治記者である。現在は毎日新聞、サンデー毎日、スポニチに毎週一回コラムを連載するなど活躍されている。永年にわたり政治を見続け、独自の政治観を持つに至った岩見氏は、日本新党的なものをどう考えているのだろうか。

一方、前原誠司氏は日本新党の理念に共鳴して入党し、昨年七月の衆院選で京都一区から立候補し二位当選を果たす。しかし今年五月、日本新党がその当初の理念から大きくはずれてしまったとして、かつて日本新党の盟友であった新党さきがけに移党した。最近まで日本新党の内部にいて今は外から見ている前原氏にとって、日本新党ブームとはなんだったのか。二人の討論に期待したい。

なお前売券は五百円で、京大生協で販売中である。当日券は七百円。

また、定期購読者の方は、定期購読者カードか特券を持ってきて頂ければ、無料で入場できます。

岩見隆夫インタヴュー

この討論会に先立ち、岩見隆夫氏にインタヴューを行った。岩見氏の話は、政治から最近の学生についてまで多岐にわたり、テレビ画面等での印象とは違う一面がうかがえた。今回の討論会のテーマとは直接には結びつかないが、岩見氏の「人となり」を知るのに役立てば幸いである。

▽子供時代の思い出

――まず岩見さんの子供時代のことをお聞きしたいのですが。

私は、昭和十年に旧満州の大連市というところで生まれたんです。当時は日本の植民地ですよ。親父は山口生まれなんですが、職場が満州電信電話会社だったんで向こうで生まれたんです。それから新京・吉林というどこを廻ったあと、また大連に戻ったんです。終戦のときは小五でした。それから山口の防府に帰ってきて小学校の最後と中・高といました。中学時代に校長の提案で月一回新聞を出すことになった。僕はすぐそれに参加しました。熱心な先生がおって、一生懸命記事を書いたよ。毎日新聞の当時時局にあった西部本社を見学しにいったり、学生新聞コンクール――たまたま毎日が主催していたんだけど、それに参加したり。

――京大に入学した経緯は？

やっぱりその頃の家庭環境かな。兄貴は九州大学にいっていたから、それより上の大学にますます決めた。東京まで、というエネルギーはなかったな。

その頃は進学という状況じゃない。だから京大一本。落ちれば就職を決めていた。

――なぜ法学部を志望されたのですか。

よく覚えていないですね。京大法学部が自由だとかそういう細かい知識はなかった。ただ京大に憧れていただけで。

でもその頃は「男が行くのは法学部くらい」っていう感じだったね。理科系は苦手だった。やっぱり田舎なんだな。長州という気風もあるかもしれない。

▽京大新聞の思い出

――入ってすぐ京大新聞に？

当時一年生は宇治分校だった。兵舎の跡みたいなところで講義があって、黄檗山に寮がふたつあった。ある日広報板に「編集員募集」と出たんだ。試験があって、その日はたくさん並んどった。作文と面接を宇治の汚い小屋でやったんだけど（注：今は入社試験はありません。来るもの拒まず）、四人通った。卒業まで残ったのは僕ともうひとりの二人だったけど。

――どういう記事を書かれましたか。

三回生の時に編集長をやったんだけど、記憶に残っとるのは一面でやった「京大の原子力研究」というやつ。湯川さんとか朝永さんとか理学部などの人に聞いたり、一生懸命勉強したよ。そうしたら京大記者クラブの記者がみんなやってきて、「どうしてこういう企画を思いついたのか」と聞かれたのを覚えてる。どうして、といわれても困って、勉強して書いたんだ、と答えたけれど。

あとはルポルタージュに力を入れた。砂川、富士山麓、沖縄とか、軍事基地のルポとかね。防衛庁に泊まり込んだり。

それから「共産党京大細胞ルポ」とか。当時の学園新聞（京大新聞の当時の名称）は京大細胞が牛耳っていた。僕は共産党には入ってなかったけど。まず細胞会議で何をやるか決めてから新聞の編集会議にでガーッとやるんだ。でもそうやって一党一派に与するのはよくないでしょ。そんなことから「共産党京大細胞ってなんだ。俺が見てきてやる」となった。その企画が通って、それで京大細胞のキャップへのインタビューとかいろいろやった。

だから四年間で何をやったかというと、学問を志す大学に非常に申し訳ないけれど、ただただ学園新聞をつくっとったね。講義も出んかったし、単位もプリントでなんとかとっていた。そのかわり取材を通して全学部の教育に会いましたね。でも学問は放棄したに等しい。

けれど大学を出て就職のときは、法律の問題が出るんですよ。でも法律はわからなかったから普通の企業を受ける気はなかったね。マスコミは、東京新聞・テレビ・岩波書店などたくさん受けた。その結果毎日新聞が受かったんだ。

――毎日は現在中退者も採るとか。

今は学歴は関係ないですよ。義務教育さえあれば。あとは年齢制限だけです。

▽毎日新聞社に入って

――入社試験はどうでしたか？

その時は関西大学の大教室で試験があってね。そんな大部屋は新聞社にはないんですよ。千人くらい受けたかね。記者は。その頃は一種の就職難ですよ。毎日は東京・大阪別採用で、大阪は四人採用でしたよ。

――千人中四人ですか。

そうだよ。学園新聞も四人だったけどね（笑）。四人なんてクジ引きするようなもんですよ。

で、僕は受かってそのまま大阪の社会部に七年くらいいました。

――社会部だったんですか。

ええ、駆出しはみんな社会部ですよ。で、何をやったかというと警察回りだね。だから大阪府下の警察は全部廻ったね。

そうしたら、東京の社会部にいってこいとなって。「すぐ帰ってきたらええがな」って言われて。僕もすぐ帰るつもりだったんですよ。その頃は登記上は大阪が本社だったのです。今は東京ですけど。だから大阪は本社意識が強くて。もともと大阪からでた新聞ですから。

それで東京の社会部に一年半ほどいたら政治部に行けって言われて、それで居座っちゃった、というか。長々と政治部にいるわけです。

落ちたら　就職を決めていた

学問は放棄したに等しい

千人中四人なんて　クジ引きするようなもんですよ

模擬店ではリサイクル皿を

ゴミ対策にNF環境対策委と生協が協力

毎年毎年、非常に多くの模擬店が出店されるが十一月祭では、当然のことながら、排出されるゴミも膨大な量に上る。どのくらいの量かというと三年度で推定約三・六トン。そのゴミを始末するために、期間中は毎日夜を徹して作業をしなければならないほどである。世間ではリサイクル社会の到来が叫ばれているおり、当然ながら十一月祭で排出されるゴミも減る方向にゆくことが求められている。

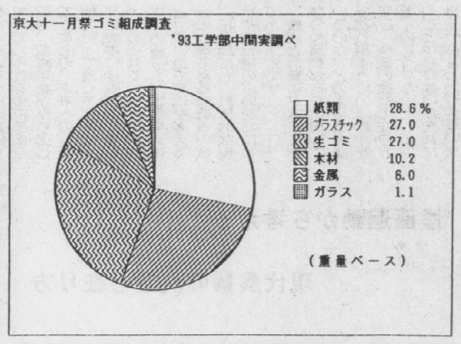
そのため十一月祭環境対策委員会が今までは細々と行なわれていた模擬店に対して再利用可能な食器の貸し出しを、今年から生協と協力して大々的に行なうことになった。

十一月祭環境対策委員会は、今年六月八日に行なわれた九四年度第一回十一月祭全学実行委員会で設置された、今年初め発足した委員会である。この第一回実行委員会上で、十一月祭への環境対策における提起を行なった工学部十一月祭中間実行委員会の林里吾委員長は、「日々の生活においても環境への影響を無視した行動が取れなくなりつつあり、生活習慣の見直しが進められつつある中、十一月祭だけがその流れに逆行することはできない」と言う。この提起によって環境対策委員会が設置され、昨年度までは十月祭中間実行委員会で行なわれていた十一月祭での環境調査や、再利用可能な皿の貸し出しが今年も同委員会により継続され、更に今年度からの取り組みとして、缶やビンの分別回収なども行なうことも決定した。

昨年までも実施されていたとはいえ、ほとんど知られていなかった再利用可能な皿の貸し出しは、今年は生協と協力しておこなわれる。現在のところ、この取り組みに協力予定の模擬店の数は六つ。昨年、工学部十一月祭中間実行委員会でまとめられた「九十三年度NF環境調査報告書」では、模擬店に対して行なったアンケートや学内の水道の実態調査などの結果から、再利用可能な皿の使用は、皿を洗う場所の少なさ、回収の困難さなどの理由によって大規模に行なうことは難しいだろうと結論付けている。これに対して、皿を洗うことも、多数の皿や洗浄のための機械・水道を持つ生協に協力を要請しようということになったそうだ。その具体的なシステムとしては、各模擬店が客に食べ物を販売するときにデポジット金として百円を預かり、客が食器を返却に来たら販売するときに預かった百円を返却する。各模擬店は返却された（洗浄しなければならない）皿がある程度たまったらそれを生協の吉田食堂へ持っていって洗ってもらう。皿を洗うのは環境対策委員会や各模擬店から人手を提供してもらって行なうことになっている。また環境対策委員会によれば皿の貸出費用は一枚四円が十円かであり、使い捨ての皿を使用するより安くあがるともいう。最初の案では客はこのシステムを採用している店ならば、どの店にも食器を返却できるはずだったが、途中で貸った店に返却しなくてはならないようにシステムが変更された。これは客の側からいえば利用しにくくなったといえるわけで、複数の模擬店が同じ皿を使うことも、ありうることを考えれば、来年からはシステムの変更が求められよう。ともあれ再利用可能な皿の使用を拡大することは、ゴミの減量に大きな効果をあげると期待される。

また、昨年工学部十一月祭中間実行委員会で実施された公開ゴミ調査による、燃えるゴミとして集められたもののうち、発泡スチロールやペットボトルなどのプラスチック製品のゴミが重量比で二十七％、紙や紙コップなどの紙類が二十九％と、この二種類だけで五十％を超えている。これが重量比であることを考えると、体積比では七～八割を占めることが予想される。また、これらのゴミは使い捨ての皿が使用されなくなれば、その量が非常に少なくなるであろうことを考えると、再使用可能な皿を使うことが大きな意味を持つと考えられる。この調査ではアルミ缶・スチール缶などの金属類・ビン類として別途集められたゴミは調査されていないが（燃えるゴミの中に混在していた金属・ビン等は調査されている）、その量も膨大なものに上るために分別収集も行なわれることになった。

今やブームになった感もある環境問題だが、実際に「環境にやさしく」を実行するのは難しい。今年の十一月祭で行なわれるこの試みが成功するかどうかは、今年行なわれる十一月祭環境調査によってある程度わかるだろうし、客となる我々が積極的にそのような店を利用することを考えても良いのではないだろうか。（終）



京都大学新聞

学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田京大構内
(761) 2054 直 通
(753) 7531（内線2571）
FAX (761) 6095
振替01020－3－3909
1部 100円

京大生CD10～15％引き!!
ニューミュージック・ロック・クラッシック・ジャズ多数
エスニック・ビデオ・レーザーも豊富に取揃え！
〈注文取寄せ一～三日〉
ミュージック・カイトショップ
コンフォート
TEL・FAX075(701)8434

■今号の紙面■

NF特集号
一・二面　岩見隆夫氏インタヴュー
三面　連載 レポート・中米の旅
四面　複眼時評 文学部建て替えについて

サクセスブック'94
京都大学を知る本
絶賛発売中
●特集「教養部廃止と一般教育の行方」
●OBインタビュー　綾士行人（ミステリー作家）
●大学の諸相を探るコラム　岡本堂彦／丸木俊／石川九楊／粉川哲夫／野崎六助　潤歌。
●カラーグラビア「京大を建てた人々」
●その他　京大ミュージックシーン、学生生活、研究生活、学部紹介など企画を満載。
お求めは全国有名書店・生協で。
編集・京都大学新聞社
発行・㈱六甲出版

京都大学出身 岩見隆夫の本
日本近代史が生んだ"大怪物"の実像に迫る!!
新版 昭和の妖怪・岸信介
岸と小沢一郎とは「明治維新への憧憬」の一点で交わる（「あとがき」より）
混迷の政治状況の今、だからこそあえて本書を再び世に問う！
四六判上製 ●1,400円（税込）
八年余、104編の卓抜なる人物論!!
自民党没落の軌跡
鈍刀とカミソリの功罪
中曽根康弘から細川護熙まで、6人もの首相が入れ替わった政治の現場と、政治家群像を人気ジャーナリストが絶妙の筆致で追う！
四六判上製●1,800円（税込）
朝日ソノラマ　〒104東京都中央区銀座4-2-6　☎03(3563)6021～3

関西文學
月刊同人雑誌　毎月8日発売
定価700円（送料76円）
編集・発行／関西文学の会　発売／株式会社関西書院
広く才能の糾合を目指し
活動の主体たる同人・会員への
加名・入会を期待しています
見本誌と入会案内送呈（要80円切手8枚）
購読のみの場合は年間9,312円（送料共）
関西文学賞募集中
文芸評論／詩／小説／随筆・エッセイ
各部門締切り一毎年8月末日消印有効
●応募枚数、賞金、発表など応募要綱は、毎号の「関西文学」誌の目次裏面に収載。
織田作之助賞募集中
―主催／大阪文学振興会―
小説（ジャンルを問わず）50枚以上100枚以内
締切り一毎年5月末日消印有効
応募要綱など問合せは「織田作之助賞」係
大阪市生野区林寺2―20―1
☎(06)714-5946／FAX(06)714-2023
郵便振替／大阪 00950―1―24838

週刊誌の記者には腹が立つ

（一面より続く）

▽インタビューについて

——岩見さんはインタビューをたくさんされてますが、苦労話などがあったらお聞かせください。

そりゃあ、いい話というのは一回や二回行っただけでは話してくれませんねえ。

——そんなときにはどうするんですか。

そりゃあ親しくならなきゃだめですね。はじめてインタビューお願いしますって行って、すぐにいい話が聞けるなんてそんなことあり得ない。甘いの。

——何度も何度も行かれるわけですか。

いや、何年も何年も。いい情報っていうのはそれだけ年季がいるんですよ。あの人のところにはこういう情報があるだろう、とわかっていても、行けば聞けるというもんじゃない。情報って言うのは元手がかかるんですよ。

最近僕が腹立つのは、週刊誌の記者。ぼくなかの自宅に電話してきて、「政界のあれこれはどうなってるんです？」って平気で聞きよるね。「きみは僕に会ったことはあるの？」ってきくと、「いえ、今日はじめてお電話します、週刊誌なんとかの誰それです」と。「僕は君ねえ、情報を取るのに何十年もかけてるんだよ。確かに情報はもってますよ。それをねえ、顔も見たこともない君にねえ、電話一本で得ている情報を僕がしゃべると思うかね？なにやっとるんだ」と説教するんだよ。

▽現在の仕事について

——今興味をもって追われていることはなんですか。

やっぱりこの国の政治構造が変化を起こしつつあることですね。ご承知のとおり、自民党時代は終わったわけです。それでその次に何がくるのか。今はその新しいシステム作りの最中ですから、その点を追っています。つまり「どういうものを作ればいいのか」というのが関心事ですね。単に「政党政治」といってもいろいろ形がありますから。で、村山政権が出来たけど、これもひとつの実験なんですね。ゴールでもなんでもなくて。だからこれからいろいろ起こるでしょう。

——執筆に際して心掛けていらっしゃる事はなにかありますか。

そうですね。僕は学者じゃないしね。何か論をなそうとする仕事じゃなくて、正確な情報を提供するのが第一の仕事ですから。だからやっぱり今の政治の問題では政治家の肉声をどれだけふんだんに取れるか、というのが非常に大切ですね。

それからただ肉声だけを紹介したんじゃだめなんで、その肉声が意味するところのものをうまくわかりやすく分析して解説を加えるという仕事です。簡単に言えば。ただそれはきわめて難しい作業です。

——ということは、できるだけ主観のはいらない新聞記事のようなものを心掛けてらっしゃる、と？

それはそうでもないんだなあ。政治記事における客観報道はあまり意味がないような気がします。やはり僕の目から見た政治現象を書くわけですから。

僕はもう年寄りになってきてますから、書くものみんな署名記事になっちゃうわけです。つまり、僕の責任で書くわけなんです。普通の政界の日々のことというのは若い記者が書けばいいんで。今は多少分析を含んだ、つまり「岩見隆夫の客観報道」を心掛けていますね。まあ情報にもいろいろあるけれど、基礎的な第一情報を伝えるというのはすごく大事なことです。そういう基礎的な第一情報を提供していくのが僕の仕事なので。

その辺になってくると一番大切なのはサービス精神なんですね。あなたが読者だとすると、あなたが何を知りたいのか、何を面白いと思うのかを知らないといけないわけで。面白くもない情報を書いたって読まれないんですよ。何の値打ちもないんです。たとえば、小沢一郎でも小沢一郎のどこに読者は興味をもっているのか。読者の顔つきや目付きを見取ってそれを完璧に受け取る能力がないと、それはジャーナリストとしてはなかなか一人前になれない、ということですよ。

▽今時の学生について

——今の学生について思うことをお願いします。どのようなイメージを持っておられますか？

やっぱり入ってくる若い記者をみてるとね、僕らの時代に比べると個人主義が徹底したと思いますね。それはある意味で羨ましい。でも、それがその人の人生の活動範囲とか交遊範囲とかを結果的に狭めるんじゃないかと思います。最近そう感じますね。

ですから個人主義というのは自分一人に閉じこもることじゃ決してないんだと思うんです。やっぱりたくさんの舞台で飛び回ろう、たくさんの人と知合おう、ということになると、どうしてもどこか自分を捨てるというか、自己犠牲の精神がないとなかなかできないんですね。「ロスでもいい、無駄でもかまわない」その精神でやらないと人生あんまり面白くないんじゃないかと思うんですね。今の学生諸君をみてると、非常に自己利益を中心に考えすぎて損をするんじゃないかと思うんだな。つまり目の前の利益を追求して大きな利益を失うんじゃないかという不安を感じますね。

だから今あんまり収穫はなくても、もっと大きなスケールで生きたほうが結果的に人生面白いんじゃないかな。仕事もいい仕事ができる——という感じがするわけ。そりゃあ社会も変わったんだけど、僕らは先輩に誘われたら喜んでついていって、先輩の話を聞くのも楽しくて仕方なかったけど。今は先輩からなにかを奪ってやろう、という意識がすごく強いですね。

もっと大きなスケールで生きた方が人生面白いんじゃないかな

この国の国民は今ほとんど危機感がないんですよ

今の学生は自己探求をあんまりしてないんじゃないかな

だけれどもこんなに有り難いものはないんだな。先輩っていうのは何十年も長く生きてるんだから、そのエキスを聞くというのはすごく有益なんだ。で、先輩にしてみたらそのエキスを伝えたくて、「ちょっとおまえつきあえ」っていうんだけれど。一種の本能ですよ。しかし最近の若い人はそれを拒むんだよ。だからね、先輩後輩が一緒に酒飲んで語り合う情景というのは新聞社でもすごく少ないですよ。極端に言えば、これは一国につながると僕は思うね。つながっていかないわけですよ、知恵が。というのも、この国の国民は今ほとんど危機感がないんですよ。世の中に対して、生きていくということに対して。

——危機感ですか？

そう。要するとこれ以上先端技術を高度化していくということは二の次であって、やっぱり人間関係をいかにうまくしていくかっていうのがこの時代の最大のテーマだと思うんだな。僕らの時代は飢餓とか敗戦とかいろいろあったから、そんな理屈がなくてもみんなでダーッと一緒になってやれたんだけれど。今はそういう意味で非常に難しい時代だよね。みなさん一人一人自分のタコツボに入ったって生きていけるんだから。

——とりあえず死にませんしね。そのほうが心地よいのかもしれない。

だから外国にいく日本人が増えても意識は内向きなんだよね。それだから国際貢献に金を使ったって意識が内向きだから生き使い方にはならない。それをどう切り替えていくか、ということは我々日本人の大テーマだね。それを切り替えないとこの国はダメになる、と僕は思っている。

——大学のサークルにも同様のことがあります。同じテニスをやるのでも昔は体育会で厳しくやりましたが、今はサークルで楽しく友達感覚でやるというのが流行っています。

広がりがないんですよね。そういうのには。それはどういう事なのかな。僕らが学生の頃は「小市民的」といったけど。つまりささやかな自分だけの幸せに閉じこもってしまうという。それをやっていると国そのものが非常にいびつになっていくんじゃないかなあと。

僕らジャーナリズムの問題もそれだし、今の学生に何を言いたいかとなれば僕はそれをいいたいですね。だから学生時代にいかに幅広く友達を作るか。知らない教授でも他の学校の教授でも、会いにいってみればいいんですよ。興味があれば。どんなに喜ぶことか。

——学生について、何かいい面はありませんか？やはり個人主義でしょうか。

うーん。だがその個人主義って言うのは、個人主義によって自分の個の確立をきちっとしていく精神力があるならいいんだけど。それはともかく、生活スタイルが非常に個人主義的になってきていると思う、と言いたかったんですね。

個を確立する精神力とは、要するに自己探求みたいのがあるでしょう。「俺はこういう男なんだ」みたいなことを学生時代はよく考えるとか、そういうこと。自分の存在は何なんだ、というようなことを最近の学生はあんまり考えてないんじゃないかな。そんな感じがしますね。

日本人はまだ意識が内向きなんだよね

そう。要するとこれ以上先端技術を高度化していくということは二の次であって、やっぱり人間関係をいかにうまくしていくかっていうのがこの時代の最大のテーマだと思うんだな。僕らの時代は飢餓とか敗戦とかいろいろあったから、そんな理屈がなくてもみんなでダーッと一緒になってやれたんだけれど。今はそういう意味で非常に難しい時代だよね。みなさん一人一人自分のタコツボに入ったって生きていけるんだから。

——とりあえず死にませんしね。そのほうが心地よいのかもしれない。

だから外国にいく日本人が増えても意識は内向きなんだよね。それだから国際貢献に金を使ったって意識が内向きだから生き使い方にはならない。それをどう切り替えていくか、ということは我々日本人の大テーマだね。それを切り替えないとこの国はダメになる、と僕は思っている。

——大学のサークルにも同様のことがあります。同じテニスをやるのでも昔は体育会で厳しくやりましたが、今はサークルで楽しく友達感覚でやるというのが流行っています。

広がりがないんですよね。そういうのには。それはどういう事なのかな。僕らが学生の頃は「小市民的」といったけど。つまりささやかな自分だけの幸せに閉じこもってしまうという。それをやっていると国そのものが非常にいびつになっていくんじゃないかなあと。

僕らジャーナリズムの問題もそれだし、今の学生に何を言いたいかとなれば僕はそれをいいたいですね。だから学生時代にいかに幅広く友達を作るか。知らない教授でも他の学校の教授でも、会いにいってみればいいんですよ。興味があれば。どんなに喜ぶことか。

——学生について、何かいい面はありませんか？やはり個人主義でしょうか。

うーん。だがその個人主義って言うのは、個人主義によって自分の個の確立をきちっとしていく精神力があるならいいんだけど。それはともかく、生活スタイルが非常に個人主義的になってきていると思う、と言いたかったんですね。

個を確立する精神力とは、要するに自己探求みたいのがあるでしょう。「俺はこういう男なんだ」みたいなことを学生時代はよく考えるとか、そういうこと。自分の存在は何なんだ、というようなことを最近の学生はあんまり考えてないんじゃないかな。そんな感じがしますね。

十一月祭の企画から

講演会『そのように人は生きる』

——メキシコ「先住民族武装蜂起」が示したもの——

講師：八木啓代（作曲家・歌手）
太田昌国（ラテンアメリカ研究家）
日時：十一月二十三日（水）午後一時から
場所：文学部第一講義室
主催：文学部十一月祭実行委員会

今年一月一日、メキシコ南部チアパス州で発生した先住民による武装蜂起のニュースは、各地で少なからぬ動揺を生み出し、全世界をかけめぐった。「一九九四年一月一日」とは、北米自由貿易協定（NAFTA）発効の日であり、また、「国連先住民の十年」の第一日目でもあった。

このメキシコ先住民蜂起は、われわれ日本に住むものにとってみれば、地球の裏側の、奥深い密林のなかで発生した縁遠いものに思われるかもしれない。しかし、サパティスタ民族解放軍（EZLN）を中心とする住民たちが「武装蜂起」として表現せざるを得なかったその根拠への問いかけは、単にメキシコ政府に対するものにとどまらず、「先進国」に居住するわれわれに対しても鋭く突き付けられているものであるように思われる。

彼らはなぜゆえに銃を手にしたのだろうか？

一四九二年の「コロンブスによる新大陸発見」以来、西欧諸国がもたらした力トリシズムと「近代文明」がいかに彼ら先住民の生活を破壊したか、この五百年間を彼ら先住民——インディオにとってとれほどの災厄がもたらされたのか、そういった問題が、「大航海時代」からこんにちに至るまでうち続く「現在」の問題であることを、今回の先住民族武装蜂起は明確に指し示した。

チアパスの先住民たちは、伝統的な生活を守り、自らの食料を確かはばかりの耕地で栽培する一方、コーヒー、カカオ、トウモロコシ等の大規模農園での季節労働に従事し、僅かな現金収入を得ることでようやく生計を成り立たせている。その先住民たちに対してメキシコ政府は、先住民差別政策をとり、医療、教育などの一切の権利を与えず、さらには貧困と飢えを、人権抑圧が常態化するなかで、生活の基盤の農地である共有地を奪いとっていったのである。

サパティスタはNAFTAを「先住民族に対する死亡宣告書である」と断罪した。彼らにとってNAFTAとは、資本主義経済システムの「自由貿易体制」にメキシコ自らを組み込み、資本の「進出」によってメキシコを「近代化」「開発」「市場化」していくもの、すなわち彼ら先住民からは土地を奪い、大農園の小作へと追い込むと同時に、米国から流入する大量の安価な農産物によって、国内へトウモロコシなどを供給するチアパスの農業に大打撃を与えるもの、つまるところ先住民にさらなる困苦を強制するものにほかならないものなのである。

こうした背景の下で、誰が先住民が蜂起することを止められるのであろうか。

サパティスタの副司令官マルコスは問う、「何ゆえに我らは蔑しをうるのか」と。その問いかけは、われわれの住むこの「日本」、いや全世界をも包み込むものである。いったい、誰が原因となり、それと引き換えに誰が災厄を蒙るのか。

われわれは、この問いをどのように受け止め、どのような解答を導きだすことができるだろうか。「北」に住むわれわれと彼ら先住民、あるいは「南」の、第三世界の人々とはいかなる共同の作業が可能なのだろうか。このような点をわれわれはじっくりと検討してみる必要があるのではないだろうか。

「われわれは正義を求め、前進する」だろう。われわれの心の中には希望があるからなのである」とのEZLNの声をわがものとするためにも。

講師紹介
八木啓代　フォルクローレ歌手。作曲家。ラテンアメリカと日本を結ぶ演奏活動を行う。今年一月のサパティスタ武装蜂起に際しては、滞在中のメキシコから現地の生の情報を全世界に発信する。

太田昌国　編集者。ラテンアメリカ研究家。ボリビアの映画集団ウカマウ集団の自主上映運動を中心的に担う。また、東アジア反日武装戦線の救援活動を精力的に行う。著書に『鏡としての異境』（現代企画）『鏡のなかの帝国』（現代企画室）など。

講演会「環境調和型社会とは？」

地球環境問題を根源的にとらえ
新しい環境調和型社会を提案する

講師：内藤正明（環境庁国立環境研究所 地域環境部門総括研究官）
日時：十一月二十日（日）午後三時から
場所：工学部八号館第三講義室
主催：十一月祭工学部中間実行委員会

地球環境問題は既に深刻な状況であり、将来についても社会の時勢は改善するには不十分であると悲観する専門家が多い。

こうした状況の中で、社会の将来を担っていく学生として、地球環境問題に取り組むことは必要不可欠のことであると言えるであろう。しかも部分的にではなく、ある程度の痛みは伴うであろうが、社会全体の大きな変革が必要となってくるとも容易に言うことができる。そうであるとすれば、複雑に相互に連関しているこれらの環境のための諸問題を全体的に捉えることは、地球環境問題に取り組むための第一歩であることは間違いない。これは学生に限らず、この地球に生きるものみんなの問題なのだ。そのために十一月祭工学部中間実行委員会では環境庁国立環境研究所地域環境部門統括研究員の内藤正明氏を招いて、講演会を行なう。

この講演会は、こうした立場を真に認識するためのよい機会となるであろう。内容はまず「環境問題の現状、その特徴と将来の予測」「現在における環境問題の原因、環境観、「環境調和型社会・都市部門」、といったことについての講演。その後、参加者を交えての討論会となっている。

講師経歴　一九三九年大阪府高槻市生まれ。京都大学衛生工学科卒、京都大学工学博士。同学科助教授を経たのち国立公害研究所に入所、現在環境庁国立環境研究所地域環境研究部門統括研究員。環境システム工学を専攻。著書に「環境システム工学」「地球環境キーコンセプト74」「エコトピア」（日刊工業新聞社）、「環境指標」（学陽書房）、「環境を守る技術」（講談社科学選書）などがある。

A講演会　都市と農村の気持ちいい関係

～産直運動から考える～

講師：樋田　劭（京都精華大教員）
農家の方（予定）
日時：11月22日（火）午後2時から
場所：農学部総合館大講義室 W100
主催：農学部学生自治会常任委員会

現在世の中は確かに「便利」で「豊かに」です。しかし豊かなはずのこの社会に住んでいても金の力や、今の在り方ではうつろになることもあります。例えば、アレルギーやアトピーなどの不思議な病気が起こる中で、多くの人が今の市場を通して流通する食べ物では「健康」や「安心」は得られないと感じ始めました。一方、農家にとっても従来の市場を通した流通に対応する農業ではなかなか展望の見えない状況があります。そこで農家と消費者を直接結んで信頼関係を作り、解決しようとしました。これが最初の産直運動です（もちろん産直運動にも生協やその他いろいろな形態がありますが、この場合は有機農業を中心とした産直運動を指します）。

産直運動は市場を通したものの流れにはなかった人間関係、都市と農村の人々の交流を作り出しました。そして有機農産物ブームが訪れ、有機農産物が街なかにあふれている今もなお大きく広がっています。これに関わる人はどういう問題意識で、何を目指してどのように現在活動しているのでしょうか。

このシンポジウムでは農業やエネルギーの面から現代社会のゆがみ、利那性を批判し、御自身で実際に産直運動をはじめとした活動を行っている市民運動に参加しておられる稲田劭氏を招き、産直運動が作り出してきたもの、未来への可能性を語って頂く予定です。更に実際に産直運動に関わっておられる、枚方にお住まいの農家の中嶋泰人氏と、使い捨て時代を考える会の会員である消費者の秋山花子氏にも、具体的な現状や御自身の思いをお話し頂く予定です。

農民と消費者が直接に結びつく運動が何を目指しているのか、どのような意識で取り組まれているのかを学び、今後の農業の在り方をひのようなものとしていくことが必要なのかを共に考えていきたいと思います。

産直運動から考える
現代農業の問題と在り方

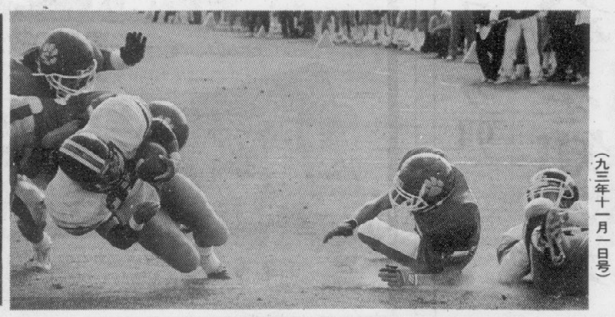
ダイガクを切り貼りしないか

京都大学新聞編集員募集中

〔詳しくはBOX（西部講堂北側）まで〕

▶時計台でもみ合う学生有志と職員（九三年六月一日号）

▶十一月祭の光景（九三年十一月一日号）



◀アメフト立命館大学戦（九三年十一月一日号）

▶紛糾が予想される北部構内のゲート（九三年十二月一日号）

1994 京都大学11月祭
主な講演・シンポジウム企画

◎20日（日）

企画内容	時間	会場	主催団体
国際法模擬裁判(NISHII CUP '94)	10:00～	法経3番etc.	国際法学研究会
痩せてる「私」は美しい？（上野千鶴子×斎藤学）	13:00～	法経2番	経済学部NF実行委員会
百姓が世界を変える（大野和興）	13:30～	法経7番	京大ユニセフクラブ
都市計画（五十嵐敬喜）	14:00～	法経5番	11月祭本部
環境調和型社会とは？（内藤正明）	15:00～	工学部共同第3講義室	工学部NF実行委員会

◎21日（月）

地球時代の言語 エスペラント（梅棹忠夫×水野義明）	14:00～	法経4番	エスペラント語研究会
どうなる？米の輸入自由化後の日本（辻井博）	14:00～	農学部W224教室	農薬ゼミ

◎22日（火）

現代政治を斬る！（岩見隆夫×前原誠司）	14:00～	法経1番	京都大学新聞社
ビザンツ専制国家体制の確立と「政治文化」（井上浩一）	13:00～	法経2番	歴史研究会
東アジアの経済発展と環境問題	14:00～	法経5番	アイセック
都市と農村の気持ちいい関係（槌田劭）	14:00～	農学部W100教室	農学部NF実行委員会

◎23日（水）

ゲイの11月祭天国（浅田彰×平野広朗）	12:00～	法経7番	経済学部NF実行委員会
模擬裁判'94最後の審判	13:00～	法経4番	京都大学法律相談部
「そのように人は生きる」（八木啓代・太田昌国）	13:00～	文学部第1講義室	文学部NF実行委員会
男性学vsフェミニズム（パネラー交渉中！）	13:30～	工学部共同第2講義室	文化人類学（ジェンダー論）ゼミ
新しい日本の選択（田中秀征）	14:00～	法経1番	京大政経塾
大学教授は今（桜井邦朋）	14:00～	法経5番	11月祭本部
小説家と批評家は舟でゆく（金井美恵子×渡部直己）	14:00～	法経6番	京都大学現代文学研究会
女性とAIDS（小田切明徳×河野美代子）	15:00～	医学部解剖センター講堂	京大医療研究会

第2回

レポート・中米の旅

外国人ボランティアの役割（グアテマラ）

太田裕之（京大法学部学生）

一九九三年十月二十四日。僕が乗った飛行機はグアテマラ時間で午前六時前に着く。夜中にロス・アンゼルスを出て、もう五時間ぐらいが過ぎたろうか。空が白みはじめ眼下にグアテマラの大地が見えてきた。前回は陸路で入ったので、空からグアテマラを見るのはこれが初めてである。朝焼けに染まるグアテマラの山並みはたまらなく美しい。この美しい大地に、これまで多くの人びとの血が流され、今も抑圧に苦しむ大勢の人びとが暮らしている。そう考えると何だか妙な気分になる。

＊　＊

グアテマラはメキシコの南に位置する中央アメリカの小さな国だ。北半分は熱帯雨林が広がるジャングル地帯、南半分はいくつもの火山が連なる山がちの地形となっている。国土面積十万九千平方キロメートル。人口九百五十万人。この人口の六割をマヤ系先住民（以下、インディヘナと記す）が占めると言われている。日本では「古代マヤ文明」として考古学や民族学・文化人類学などに登場してくる、あの「マヤ」の人びとだ。

美しい風景とマヤの古代遺跡、色鮮やかな民族衣装を着たインディヘナの人びと――。日本では魅力あふれる観光地か、あるいはコーヒーの名産地として知られているこの国には、実は日本ではあまり知られていないもう一つの顔がある。軍部による一般の人びと（特にインディヘナの農民）に対する凄まじいまでの抑圧と人権侵害である。この国では六〇年代以降、現在に至るまで内戦状態が続いている。八〇年代初めには政府軍によって実施された「焦土作戦」では、反政府ゲリラを掃討するという名目で、一般の人びとが暮らす村にまで攻撃の火の手が上がった。この時期には四百四十を超える村が「消滅」し、十万人近い死者・行方不明者と二十万人近い難民が生まれたと言われている。以来、現在に至るまで、軍部及び政府の方針に従わない者に対する容赦のない弾圧が加えられ続けている。

＊　＊

今回、僕がこのグアテマラへ来ることになった経緯は序章で述べた通りだ。これから僕の目で見てきたグアテマラについてお話ししようと思う。出来る限りいろいろ見てこようと思っていたつもりだが、僕の関心が人権侵害と闘う人びとに集中していたため、分野がかなり限られたものになっている点は否めない。それだけは最初にお断りしておく。それでは、これから僕の文章を通して、僕が触れてきた人びとの姿と彼らが置かれている状況についてご紹介しよう。

▲デモに際して自警団解体を要求する声明文を読み上げるコナビグア代表ロザリーナ・トゥユク。

Ⅰ　コナビグア訪問

十月二十六日、首都グアテマラ・シティにあるコナビグア（夫を奪われたグアテマラ女性の会）の事務所を訪ねた。グアテマラ・シティは中央政庁舎として使われている国立宮殿、国会議事堂、カトリック大聖堂、それに繁華街などがある、いわばグアテマラの中心地だ。コナビグアの事務所もその第一区にあった。

アンティグアからのバスを降り、繁華街を抜けて国立宮殿と大聖堂に面した中央広場へ出る。国立宮殿の入口でうろうろしていたのでは近寄ってみた。一人の男が寝転んでいるのが見える。傍らには聖書が掲げてある。ハンガー・ストライキだ。男の名はロドルフォ・ロサレス・ガルシア・サラス。グアテマラではかなりの著名人らしい。腐敗しきった国会議員の総辞職を要求しているとのことだった。そう言えば九二年の春にここを訪ねた時も、広場に座り込みをしていた一団があった。状況はあまり変わっていないのだということを実感する。

広場を過ぎると通りの雰囲気が一転する。商店の数が減り人通りもない。一人で歩くには少しばかり緊張する。ここ二～二年の間、グアテマラ・シティの治安は急激に悪化しているという。スリやひったくりだけでなく強盗・誘拐などの凶悪犯罪が増えているそうだ。白昼、四回に一人がいても襲われる事件が続発している。アンティグアに住む二十才すぎのグアテマラ人の女の子は、一人では怖くてグアテマラ・シティを歩けないと言っていた。人通りの少ない寂しい通りを歩く時には十分注意するようにとのことだった。

コナビグアの事務所はそんな寂しい通りに面して建っていた。入り口には番地を示す番号が掲げてあるだけで何も書かれていない。呼び鈴を鳴らす。扉の小さな窓が開いて日本人の女性が顔を出した。石川智子さんだ。彼女には昨夜電話で連絡してある。二重になっている鉄の扉を開けてもらい中へ入った。

＊　＊

コナビグアはグアテマラの数ある民衆組織の中でも最も精力的に活動しているものの一つだ。八八年の結成以来、常にグアテマラ国内の人権状況改善を求めて活動してきた。石川さんは九三年の五月からコナビグアを支えるボランティアとして事務所に住み込んで活動している。

石川さんに現在のコナビグアについて簡単に説明してもらう。事務所は二階建て。部屋は全部で十二室くらい。建物とビルヴェーの財団に賃ってもらったそうで、他の団体の事務所と比べるとかなり立派なものである（ちなみに欧米の間ではコナビグアはとても有名で評価はものすごく高い）。普段はメンバーの十人くらいが住み込んでいる。何かの会議や集会がある時には各地からいろいろな団体の代表者が来ていっぱいになる。この日もリゴベルタ・メンチュウ氏が来ていて会議が行われていた。

＊　＊

コナビグアが進める活動の一つに「意識化」というのがある。それは、生まれる前から抑圧され続けている人びとが、現在の状況は本来的なものでなく不当に押し付けられたものであり、改善していけるものであるということを明確に意識するようになることを指す。人口の大部分を占める人びとを完全に抑圧し続けることによって存続してきた軍部及び政府にとって人びとの意識化は大きな脅威である。また、グアテマラにおける人権侵害の国内における直接的原因と責任はほとんど全て軍部及び政府にあるとコナビグアは考える。したがって人権状況の改善を求めるということは自然と軍部及び政府を批判することになる。

軍部及び政府にとってコナビグアがこのうえもなく邪魔な存在であるのは言うまでもない。これまでも幾度となくメンバーに対する暗殺予告や事務所を爆破するといった脅迫が繰り返されてきた。

そんな中で活動を続けるメンバーにとって石川さんのような外国人支援者の存在はとても大きな支えとなる。軍部及び政府も外国人の前ではなかなか手をだせないのだ。外国人の身に何かがあれば外交問題にも発展しかねないし、観光収入が大きな外貨収入源となっているグアテマラにとっては対外イメージがとても大切だからだ。石川さんはそういったことを全て承知の上で、言わば「弾丸よけ」としてコナビグアの事務所に入りメンバーと寝食をともにしている。

もっとも実際の石川さんに会ってみると、そんなことは少しも感じさせない。身体を張ってメンバーの盾となっているような仰々しさはどこにも見当らない。メンバーの女の子と冗談を言い合い、いつも笑顔を絶やさないでいる。心から楽しんでいるように見えるし、彼女自身に聞いたところでも実際にその通りなのだそうだ。

彼女の仕事の中心は何と言ってもメンバーの手助けをすることだ。メンバーが地方に出かける時はたいてい同行するし、何もない時は事務所に残っている。じゃを更新するために国外へ出る以外はメンバーと離れることはない。それからコナビグアを支援する日本の団体との連絡も大切な仕事だ。現地の状況を日本へ伝え、日本からの支援活動の窓口となる。その他、新聞などを整理したり玄関の扉を開けたりといった雑用もこなしている。「彼女ら（メンバーのこと）の負担を少しでも軽くしたい。彼女らのかゆいところをかければいいな、と思ってる」と石川さんは僕にそう言って笑った。

仕事はメンバーに同行すること

コナビグアの最近の活動の中心課題は自警団（Patrulla Autodefensa Civil――通称"PAC"）の解体である。自警団というのは、内戦が激しかった八〇年代の初め、農村部からゲリラ勢力を排し軍部及び政府の管理を徹底するために、軍によって設けられたものだ。村人は強制的に自警団に組み込まれていった。ある者は洗脳され、ある者は言うことを聞かなければゲリラとして殺すと脅され、ある者は家族を人質に取られて、ゲリラとの戦闘に狩り出されていった。内戦が鎮静化してからは徹底した人民弾圧政策のための軍の下請け機関として利用される。人権活動家や民衆運動の指導者など、自らの権利を求めて立ち上がる者は「危険分子」として暗殺予告をされ、幾度かの脅迫に屈しない者は誘拐され殺されていった。軍部の意向を受け、それらを実行していったのが自警団というわけだ。グアテマラの人権状況を改善するには、まず人権侵害の直接実行機関である自警団を解体することが不可欠とされたのである。

コナビグアは他の諸団体と共に軍部及び政府に対して自警団の解体を要求し続けてきた。新聞やラジオといったマス・メディアを通じて何度か声明を出したり、デモ行進を行ったりして国内外の世論にも訴えかけてきた。しかしながら、いまだに軍部及び政府が自警団を解体する見込はない。それどころか、九三年の八月にはウエウエテナンゴ県のコロテナンゴで、デモ行進が終わって帰途についていた参加者が自警団の待ち伏せに遭い一人が殺され二人が重傷を負うという事件が発生している。コロテナンゴは特に自警団員の数が多く脅迫や襲撃事件が頻発しているところだそうだ。九月二十六日には同じくそのコロテナンゴで別の暗殺事件が起こる。コナビグアと並んで精力的な活動を続ける農民組織、農民統一委員会（略称CUC）のメンバーである老夫婦が、畑仕事に出かけたまま帰って来ず、翌日死体で発見されたのである。つい一ヶ月前のことだ。死体には暴行を受けた跡があり、おそらく自警団の犯行だろうと考えられている。同じ年の四月には「武器を見つけた」という名目で自警団がその老夫婦の家へ乗り込み、百ケツアル（注）と収穫物を奪い、娘を殺そうとするという事件があったそうである。

石川さんに、これまで何もなかったかと尋ねてみた。彼女自身はまだ一度も危険を感じるような目には遭っていないそうだ。

◀デモに参加するコナビグアのメンバーたち。（国立宮殿前中央広場までのこのデモの内容は今後の連載中で詳述予定。）

自警団、解体見込めず
軍の"下請け"／人権侵害の実行組織

九二年十一月には留守中のコナビグア事務所が何者かに忍び込まれ、重要書類（人権侵害の報告書や強制徴用の資料など）が盗まれたそうだ。が、彼女が来てからは何事も起こっていないという。事務所の前の通りにはいつも何台かの車が停まっており、僕も入るときにチェックされているのではないかと不安になった。この事務所に住み込んで毎日のように出入りする石川さんは当局にマークされているに違いない。が、首都のように人が大勢いる場所では、ある程度気を抜けていればそう滅多なことは起こらないのでは、とのことである。それは裏を返せば、地方や人通りの少ないところでは何があってもおかしくないということだった。

＊　＊

注　九四年現在のレートでは一USドル＝約五・八ケツアル。百ケツアルは約千七百円

＊　＊

■京大十一月祭（十一月二十日～二十三日）において、筆者とフリージャーナリストの宇多有三氏による中米諸国の写真展が開かれます。この機会にぜひお立ち寄り下さい。
場所　総合人間学部D号館一階10番教室
主催　中米研究会

大学短信

甲野訴訟京都地裁移送決定

矢野暢元教授の配偶者が、「虚構の（人権救済の）申し立てにより著しく名誉を傷つけられた」として元秘書の甲野乙子さん（仮名）を訴えている件について、東京地裁は十月二十八日、甲野被告の申し立てを認め、京都地裁への移送を決定した。

この訴訟の他に、元教授本人が小野和子人文研教授と井口博弁護士（甲野さんの代理人）をそれぞれ訴えているが、いずれも九月に東京高裁は元教授の抗告を棄却し、京都地裁での審理が決定している。これで慰謝料請求の訴訟は、審理が遅れていた甲野さんの件と併せ、三件とも京都で弁論が行われることになる見込。

生協中間総代会開催

十一月五日午前十一時より法経七番教室において、九四年度生協中間総代会が開かれた。今回の総代会の主な議題は、上半期の活動の報告と確認、下半期の活動予定の承認であった。具体的には、①改修された西部生協・ルネについて、②生協の環境問題への取り組みについて、③第六時中期計画（一九九五～九九年度にかけて行なわれる生協の継続的な事業計画）の承認について、であった。①については分煙問題が質問され、すでに改修が終わってしまってからこのようなことを問題にする生協側の対応への不満があったが、全体として穏やかなうちに議論は進み、とくに意見も出ず、時間通りの採決となった。そして圧倒的な賛成多数のもと、すべての議案は可決され、閉会した。

なお、元教授の配偶者が東京高裁に抗告したのは、十一月四日現在不明である。

外交官（I種）試験
「憲法」「国際法」「経済理論」カセット・テープ
通信添削・個人指導コース受講生を募集中！
過去二十五年の経験と実績　予想問題的中率ほぼ50%が示す確かな信頼
・京都ガイダンス及び京都ゼミナールも随時開催
【サン・メイク通信教育部】
〒240 横浜市保土ケ谷区岩井町122-15　☎045-741-8666
●案内書請求請う（無料・KY係まで）　ただし、通信添削コースか個人指導コースのいずれかを明示のこと。

新聞だけじゃない！
いろいろ出してる京大新聞
☆卒業アルバム「Year BooK」
★入学アルバム「Fresh BooK」
受験生向け雑誌「京都大学を知る本」
編集員募集中

京大「セクハラ」事件の真相
揺れる大学!!学部再編論議の行方!!
・OBインタビュー
・サークルカタログ
・学部紹介
その他学生生活に有用な情報満載!!
「京都大学を知る本95」（京大サクセス95）
今秋発売
編集：京大新聞社
075(761)2054
発行：六甲出版
078(871)1231
京大サクセス95
全国の有名書店で発売

浅田彰（京大助教授）

×

平野広朗（大阪ゲイコミュニティ）

ゲイ・アクティヴィズムの可能性 ――ヘテロ社会への提言

11／23（祝）

ＰＭ２時半開場　３時開演

アカー（動くゲイとレズビアンの会）の同性愛者人権裁判の支援集会で講演するなど、ゲイ・リブに関して積極的に発言を行っている浅田氏。対して、最近『アンチ・ヘテロセクシズム』（パンドラ）を上梓し、ヘテロ社会に対して挑発的に論を展開しているゲイ・アクティヴィスト、平野氏。ゲイ・リベレーションのあり方、カミング・アウト論など、刺激的な話が展開されそう。前売五百円、当日八百円。

他にも、「ゲイの語るライフ・ヒストリー」（23日ＰＭ１時～）、レズビアン・ゲイパレードなどのビデオ上映、カフェ、ゲイに関する書籍販売（22・23日）など、いろいろやります。

場所：法経７番教室

NF企画紹介★Interview

ゲイの11月祭天国！

インタビュー：暮石一浩さん

ゲイ・ムーブメントのヘテロ社会に対する問いかけは、ゲイ差別の現実と同時に、「男らしさ／女らしさ」といったジェンダー規範が、いかに我々の生きる社会を住みにくくしてきたかを、明確にしてきているといえよう。ここでは、11月22（火）23（祝）両日に開かれる十一月祭のイベント「ゲイの11月祭天国！」（主催：ＮＦゲイ・プロジェクト実行委員会）企画主催者の一人である暮石一浩さんに、ゲイ・リベレーションをめぐる現状、セクシュアリティの多様性などについて、企画の紹介も兼ねて語って頂いた。（聞き手　村尾卓志：実行委メンバー）

▶自称「草津のリブガマ（リブしてるオカマ）」暮石さん（上、「本当は「ラディカル・クイーン」がよかったけどサークルのメンバーに先に名のられた！」）。

最初に、このイベントをやることになった経緯からお願いします。

私は、以前から京都を中心にゲイのネットワーク作りをしたいなという気持ちを持っていたんですが、八月二十八日に東京で行われたレズビアン&ゲイ・パレード（注一）に、ゲイ・フロント関西（注二）というゲイ・サークルのメンバーと一緒に参加した時に、たまたま、同じくQフロントの日比野君と会ったんです。彼とはその時初対面だったんですが、その時彼が配っていたビラにも、秋以降京都で何かアクションを起こしたいというようなことが書いてあったんです。で、意気投合したのがそもそものきっかけです。

このイベントで、何を一番伝えたいか、っていうことなんだけど……

一つは、ゲイにとって住みやすい社会環境を創っていきたい、ということ。ゲイであるという事で、世間から変な目で見られたり、あるいはゲイ自身も自らがゲイである事を嫌がって、自分のセクシャリティに関してオープンにできない、クローゼットになってしまう。そういうゲイ・ノンゲイ双方に巣食うホモフォビア（同性愛嫌悪）を打破するためにも、まずは「ゲイはあなたの隣にいますよ」ということを明らかにしていくべきだと思うんです。

ゲイはこれまで、日陰者として生きることを強いられてきたし、ゲイ自身がそういう生き方を選んできたところもあります。例えば、『薔薇族』というゲイ雑誌がありまして、これは一九七一年発行の老舗なんですが、編集の基本路線として、社会に公認されないんだからクローゼットで生きていきましょう、という前提があるように思うんです。確かに、それまでゲイに関する情報がほとんど無かったところに、ゲイの存在を知らしめて行った、そして自分達が互いに情報交換できる場を創ってきたという役割は認めます。でも、例えば、奥さんも子供もいるけど、セックスは別の恋人とやるというような「偽装結婚」をするゲイに代表される生き方を容認してしまっているところがあるわけです。

それは、今までの時代では仕方のないところもあると思うし、そういう人達を責めるつもりはないんですが、ただ、それじゃいつまで経っても負い目を感じながら、自分をごまかしながら生き続けなければならない。それを変えるのも、ゲイ・リベレーションの一つです。

あと、私はこのイベントをゲイだけでやりたいとは思ってなかったんです。今回スタッフには、ゲイもいれば、ヘテロもいるし、同性が好きになった経験のある女の人、あるいは自分のセクシュアリティはゲイとかヘテロとかでは言い表せない、という人もいる。そういういろんな人が集ってくれたので、非常に嬉しいんです。自分は今まで異性が好きで、それが当たり前だった思っている人達に疑問を投げかける、セクシュアリティはもっと多様なんだよ、っていうことを考えている人と一緒にやりたかったわけ。

ゲイ・リブの中で当然出て来るのが、私は同性愛者である、と社会に向かってカミング・アウトしていくことの必要性、そしてそれにまつわる問題だと思います。カミング・アウトの意義について、暮石さんはどう思います？

まず最初に言っておきたいのは、よくセクシュアリティをホモセクシュアル・バイ・ヘテロといったような二分法・三分法で分けて考えたがるんだけど、それは実はナンセンスだと思う。一人一人性指向は微妙に違うから、そんなに簡単に分けて考えられるものではない。

それでも、社会に向かって「同性愛者」としてカミングアウトしていく事の必要性はあると思うんです。というのも、日本では、例えばアメリカ合衆国のように、ゲイ・パワーが無視できないレベルまで達してなくて、同性愛者は無いものという意識が人々の間にまだまだあるのね。そうじゃなくて、私達はあなたのすぐ隣にいるんですよ、ということを知らしめていくことの大切さは認識しないといけない。だけど同時に、各人をゲイ／ヘテロといった枠に押し込めることは避けたいな、と。

その「ないもの」とされていたゲイが、ここ数年「ゲイ・ブーム」と呼ばれるまでに、テレビドラマや雑誌に登場して、同性愛自体をテーマにしたものも増えてきた。これに対しては、ゲイの側からの批判もかなりあるようだけど。

どんなブームにしても、マスコミとかそれによって利益を得ようとする人によって作り出されたという側面があるし、それに乗り遅れると当たり前じゃないという差別意識を、幾つも作ってきた。ゲイ・リベレーションと直接関係ないけど、「朝シャン」なんかそうでしょ。もともと企業が仕組んだブームなのに、リンスの匂いを漂わせて学校に行かなければ不潔、みたいな。

「ゲイ・ブーム」の欺瞞性
のぞき見趣味でゲイを観察
「フツウ」を装うことの陥穽
だからオネエは差別される？

「ゲイ・ブーム」は、ゲイという存在に対して、目を閉じてはいられないということをある程度わからせた、という点では評価できるかもしれないけど、本当にゲイの姿が正しく伝えられたかどうかは疑問です。瞑った情報が助長されただけという……

例えば？

ゲイのセックスの部分だけを、興味本意で取り上げているきらいがまだまだ多いですね。北海道のＵＨＢという放送局の放映したある番組に、「気がつけばホモ」というタイルのコーナーがあったんです。この中で、ハッテン場（特定の公園とか、映画館など）、ゲイの出会いの場）を盗撮したり、ゲイ雑誌を売っている書店を、許可も得ずに撮影したりしていた。「札幌ミーティング」っていうゲイ・サークルが放送局に対して抗議運動やってますけど、なぜそういう所ばかり映すのか。そういう場があることは事実ですけど、それだけを取り上げるのは単なるのぞき見趣味でしかないのね。

この番組は対象が主婦層で、「まぁ、やぁねぇ」という反応を期待して作っているわけです。われわれが俎上に乗せられて、遊ばれて、笑われて、ゲイってこういう人達なのね、やぁねぇ、という反応しか残さない。

「ゲイ・ブーム」の罪の側面の一つとして、ゲイの存在は認知されたけど、ゲイを「容認する」とかいう高みに立ったものの言い方しか引き出せてない、ってのもありますね。僕も「君みたいにものわかりのいいノンケ（異性愛者）が一番タチが悪い」なんて言われたクチだけど……

それは、常に自分達がノーマルである、あいつらは少数派で、たぶん異常なんだけど、そういうのも受け容れましょう、というマジョリティの理屈。自分達が傷つくことも、セクシュアリティが問われることも全くない、安全地帯からの物の見方。

ところで、当日はカフェ・バーもやるんだけど、暮石さんはその場で、しきりにメンバーに女装することを勧めてましたけど……その辺の模様は店の、いい加減な「オカマ・バー」と一緒で、ちょっとステロタイプな気もするけど。

しきりに勧めてないわよ！ただ、女装だろうが男装だろうが、好きな人はすればいい。人間誰しも多身願望があるでしょ、ただまに女の格好してみたいな、っていう。「ステロタイプを助長する」っていいたい人には言わせとけばいいんであって、女装したいゲイの人もいれば、そうでないゲイもいる、そのどちらも正当なんですよ。ヘテロセクシュアルで女装趣味の人もいるでしょ（ちなみに私はしません）。

でも、世間には、ゲイ＝女装って勘違いしてる人もいますよ。

ほとんどのゲイは、女装だの髭剃だのは望んでません。逆に、女性らしさをあまり求めない、むしろ男性らしさを好む傾向が強いような気がします。それで、私みたいなオネエはゲイの中で差別されてまして（笑）、オネエ差別撤廃運動をゲイ・リブの中でやっていこうかな、と思ってます（笑）。

でも、冗談抜きで、男は男らしく、女は女らしくという考えが、ゲイでも乗り越えられていないところはあると思います。自らがフツウの人間である、ということを強調したいがために、オネエだなんてことは微塵も出さずに、「男」としての自分を演じてしまうあまり、向こうの側にあわせて、向こうの側で騒いってしまう。それもひとつのホモフォビアですよね。

今度私達の企画に来てもらう平野さんは、オネエは自分がなろうとしない女になって、男から愛されたいがために、女性的役割を演じてるんだ、と言ってますけど、私はそうとばかりも思えない。男性的、女性的という言葉自体がもう変だとなればナンセンスだし、別に女として愛されたいからオネエ言葉を使っているわけではない。遊びも半分あるし、オネエ言葉でしか言えないこともあるんですよ。

オネエのいいところって、例えば？

嫌なところもあるんですよ。一番いやらしいなと思うのは、個人をあげて申し訳ないけど、美川憲一。彼は異性装者であることを、完全に武器にしてますよね。あの人、生活派手でしょ。金持ちの成金おばさんと同じなわけ。あの人がもし女性だったら、世のオバタリアンから疎まれるわ。男性で、オバタリアンの中のオバタリアンを演じてるから、疎まれないで済む。

私はそんなことを武器にしようと思わない。でも、時々オネエ言葉は武器になるんですよね。男言葉では言えない辛辣なことを、スパッと言ってのける。でも、それは東京弁と大阪弁を使い分けるのと同じ感覚にすぎません。あと、オネエ言葉だと、自己表現が簡単にできる。人に甘えたいな、と言う時には自然に出ますね。だから、あなたを口説く時には、私オネエ言葉を使ってしまうわ。ねえ、今夜二人で一緒いたしませんか？

え、ちょっと（苦笑）。

ちょっと何よ、はっきり言ってごらんなさい（笑）。

と、話はここから盛り上がるのですが、スペースの都合上ここでおしまい。続きはイベント当日に配るパンフレットに掲載予定。というわけで、暮石さん、最後に一言。

「来るのよ!!」

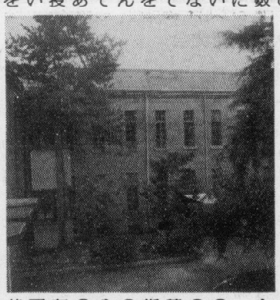
（注一）ILGA（International Lesbian Gay Association）日本支部が中心となって、千人以上の参加者を集めて行われた。本紙九月一日号に、日比野真氏のレポートを掲載。

（注二）今年四月、関西の三つのゲイサークルを統合して発足。機関誌「ぽこあぽこ」の発行、他地方のゲイ・サークルとの交流、大阪大学の学園祭企画「いったいゲイってなんやねん」の主催など、多彩な活動を行っている。

複眼時評　Fukugan jihyo

文学部建替えと都市景観の保護

G. Peternolli



▼文学部本館

目的とする機関である大学が、金の節約のために文化を軽んじるという、まったく不合理な事態になっていたことだろう。

京大の文学部の建て替えに関しても経済的に負担が大きくなるとしても、高さ三十一ｍの建物をつくらずに、環境をもっとたいせつにするようなやりかたがあると確信していたが、最近になって、文学部の新しい建物が五階より高くはならないことになったと知ってほっとした。しかし、どうやらこの計画の変更の原因は、主に経済的な理由があり、景観や環境の保護という問題を考慮しているわけではないようなので、今回文学部で行われなかったことが、将来京都大学の他の建物で行われることになるのではないかと危惧している。

経済的な節約を、文化的なことに優先させるという傾向が、この数十年の京都の都市発展の政策の特徴であった。この市政の悲劇的な結末は誰の目にも明らかである。京都は五〇年代までは世界で一番ではないにせよ、今日では京都の都市景観は荒涼とした俗悪なものになってしまっている。このように気がめるような結果だと質を思うにつけても、現在の情況はまったく痛しいものである。

もちろん京都のような街には、古い建物の保護の問題は数えきれないほどあり、その解決はむずかしいことが多い。京都の面積は非常に広いし（ヨーロッパの歴史ある街の多くはもっと狭い）、高さの低い木造の家屋は、現代の様々な要求、例えば病院や学校、デパートなどになるには向かないので、京都のかつての都市景観を完全に保存することは不可能である。だが、街に必要な現代文化は、この世界にも例をみない莫大な芸術的・文化的遺産と調和するような形をとりながら行うことも出来たはずである。機能的にも美的にも満足できるようなより方で、新しいものと古いものとを接近、調和させることは可能であったはずだし、今日でも可能である。簡素で、質素なこと、直線的な要素の多さ、そして空間の合理的な使い方などの日本の伝統的な建築の特徴は、現代建築にも似た点が多くある。実際に、日本の伝統建築は現代建築に大きな影響を与えている。しかし現代的な建築が伝統的な町並みや環境にうまく溶けこむことができるとはいっても、伝統的な町並みの間に高層ビルやあるいは非常に高い建物などが入り込んでくることは、古い町並みには受け入れられないことだろう。日本には建築的にとても価値の高い高層ビルが数知れずあるが、東京や大阪といった街では肯定的な意味を持つものも、京都のような基本的には低い建物が多くて三方を低い山並みに囲まれた歴史的な街では、否定的な意味しか持たない。昔は京都の街どのどこからでも、山々を眺めることができたし、それが街の景観の一部となっていた。今日でもこの点は、すべての京都の再開発の計画の基本的な基準とするべきである。京大周辺は第二種住居専用地域・美観地区に指定されており、二十ｍの高さ制限のためもあって今日まで周囲の景観を尊重しながら発展している。そのような地域のこの低い吉田山の近くに、三十一ｍもの高い建物を建てることはやめ、世界でも最もすばらしいもののひとつである京都の自然と都市の景観を評価し大切にして、このような根本的な文化の問題に対する敏感さを京都大学は示していただきたい。

（ジョヴァンニ・ペテルノッリ氏は文学部イタリア語学イタリア文学外国人教師。訳は遠藤礼子氏）

L建替え

卒論作成に多大な支障が

9月28日説明会

九月二十八日に、文学部の建て替え計画に関する説明会が開かれた。この説明会により、文学部の建て替え計画のうち本館北西部分（文学科閲覧室、以下文閲と略。美学・国文・言語・西洋古典の研究室がある）の取り壊し及び新館建設（今年度予算のついた二千㎡だについて）の大まかな日程が明らかにされた。

それによると一九九五年一月半ばから三月末に本館北西部分の取り壊しを行い、三月初めから六月末まで埋文調査を行う。そして七月から九六年四月までの十ヶ月間で新館二千㎡分の工事を終了させるというものである。

なお、取り壊し部分にある文閲は、期間中は現在建設中の文系共同棟に移転する。が書庫の引渡しは予定より一ヶ月遅い十一月には可能となるため、文閲に関しては十二月中に書架を組み立て、一月中に図書を移動させて二月一日に新文学部閲覧室を開室する予定となっている。

この文閲閉室期間については、卒論・修論の締切が一月中、レポート提出も二月初めとなっているので、利用者にとってはきわめて不都合である。説明会では学生からの「計画が決定する前に計画を示さなくては学部生も院生の意見の反映などできないではないか」という学生の情報公開要求に対しては「それをやることで計画が遅れると困る」（水垣渉文学部長）という回答がなされたのみであった。

その他文学部と施設部の連携の欠如の指摘や、文学部学生控室やサークルボックスの扱いについても質問がなされたが、歯切れのいい回答は出されなかった。

今回の説明会でも、文学部建て替えの全体像は見えてこない。今後も文部省や本部との兼ね合いによって建設計画が練られていくことが予想されるが、果たして利用者の意向が十分取り入れられた計画になるのだろうか。今後の動きに注目したい。

（編集部より）

▼連載「研究室の虚実」第12回は次号掲載します。

▼本紙十月十六日号「学のインターフェース」で筆者の名前が間違っていました。「松尾尊允」（誤）、「松尾尊兊」（正）です。お詫びして訂正します。

入所日…毎土曜日
運転免許は社会人へのパスポート
社会人になる前に、是非、モノにしておきたい。
――思いやりで高めよう京都の交通マナー――
―One of the most traditional in City!―
◎短期速成科、定時制、随時制の各コース
◎好評を博している同時教習（普通車と二輪車）
◎お申し込みは生協プレイガイド
親切、丁寧
確実な指導が人気のマト
京都大学より
バス送迎15分
KOETSU DRIVER'S & RIDER'S SCHOOL
普通二輪 光悦自動車教習所
〒603 京都市北区大宮玄(げんたく)琢南町25番地 TEL.075-493-0101㈹

秋のNEW!!（11月10日まで）
食欲の秋にうれしい松茸入り!!
（1人前）
きのこちゃんこ1980円
★女性のみのグループには、フルーツサービス中!!
味で勝負の ちゃんこ 恵那櫻
全室個室 無料カラオケのある 京阪三条店（ファミリーサンジョウ）
京阪三条駅東へ200m南へ10m
0120-4-05483
振りコタツ式個室 本格土佐のある 一乗寺店（イチジョウジ）
北大路白川東入ル2筋目下ル
0120-3-05483

――京大新聞の定期購読を――
学内唯一のマスメディア
京都大学新聞社